

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 19 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520768

研究課題名（和文）

横穴式石室導入に見る南四国と瀬戸内の古墳展開の研究

研究課題名（英文）

A study of the correlation between Setouti area and the south area of Shikoku Island in the late Kofun period—An analysis of the passage graves—

研究代表者

清家 章 (Seike Akira)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：40303995

## 研究成果の概要（和文）：

本研究課題は、南四国と瀬戸内の横穴式石室を比較検討することにより、古墳時代後期の両地域における交流実態を明らかにすることである。資料の分析とフィールドワークを重視して研究を進めた。

横穴式石室墳に関わる様々な要素は、断続的に瀬戸内から南四国にもたらされたことが明らかとなった。第1段階：明見3号型石室の導入、第2段階：舟岩型石室の導入（伏原大塚古墳）、第3段階：南国市域で横穴式石室が普及・風水的選地の導入、第4段階：角塚型石室の導入という各段階である。

## 研究成果の概要（英文）：

I have studied the correlation between the Setouti area and the south area of Shikoku Island in the late Kofun period by the analysis of the passage graves. I excavated Myouken no. 1 tumulus in Kochi pref. and made surveys of other three tumuli in Kochi and made reports of them.

Many elements of passage graves were not brought to the south area of Shikoku Island at the same time. A passage grave was introduced for the first time in the early 6<sup>th</sup> century. Then the information of a passage grave had been brought from the Setouchi area three times.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学・横穴式石室・南四国・瀬戸内・交流

## 1. 研究開始当初の背景

南四国は、前・中期古墳がほとんど存在せず、後期にいたって急速かつ飛躍的に古墳は展開した。しかし、南四国における急速な古

墳展開の背景、あるいはどの地域からの影響を受けて南四国の古墳が成立したのか等の点はほとんど検討されずにいた。これは、四国における後期古墳研究は長い研究史があ

るものの、旧国単位での研究が多く、地域を越えた比較研究がきわめて不十分であったからにはかならない。

研究代表者は、6年にわたって南四国の古墳の測量・石室実測と発掘調査を重ねてきた。また、そうした調査成果を用いて南四国の古墳の分析を続けてきた。その中で南四国において古墳が展開する際には、他地域からの影響が一元的もしくは一方的に南四国へ流入したのではなく、南四国勢力が主体的に活動し、複数地域との交流を行った可能性が浮上してきたのであった。すなわち、南四国勢力は複数地域と交流した結果、複数の系統の石室を受容した可能性が高い。しかれば、その交流先はいずれにあるのか。そして、古墳が急速に展開した背景は何か。このように新たな研究課題が浮上してきたのであった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、南四国と瀬戸内の横穴式石室墳を比較検討することにより、南四国の横穴式石室墳の淵源を明らかにして、古墳時代後期の南四国と瀬戸内の交流の実態を明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

瀬戸内地域における横穴式石室墳の資料の収集・分析を、踏査と出土遺物の資料化と併行しながら行う。また、フィールドワークを効果的に交えながら南四国の横穴式石室墳の分析を実施する。その上で、瀬戸内地域と南四国の横穴式石室墳を比較して、両地域の交流の実態を明らかにする。この分析を通じて、古墳時代後期における急速な古墳展開の実態とその背景について検討を進める。

## 4. 研究成果

本研究課題は、南四国と瀬戸内の横穴式石室を比較検討することにより、古墳時代後期の両地域における交流実態を明らかにすることである。ただ、南四国は基礎資料が整備されていない。そのため資料の分析とともにフィールドワークを重視して研究を進めた。

この3年間で3古墳（南国市坂ノ松古墳・南国市定林寺芝の前1号墳・香美市小倉山古墳）の墳丘測量調査ならびに石室実測調査を実施し、南国市明見彦山1号墳の発掘調査を2度にわたって実施した。前者についてはすべて調査報告書を刊行し、後者も須恵器・鉄器の図化作業を終了している。

横穴式石室の分析では、横穴式石室墳に関わる様々な要素は、一時期にもたらされたものではなく、断続的に瀬戸内から南四国にもたらされたと考えられた。すなわち以下の4段階である。

第1段階：明見3号型石室の導入、第2段

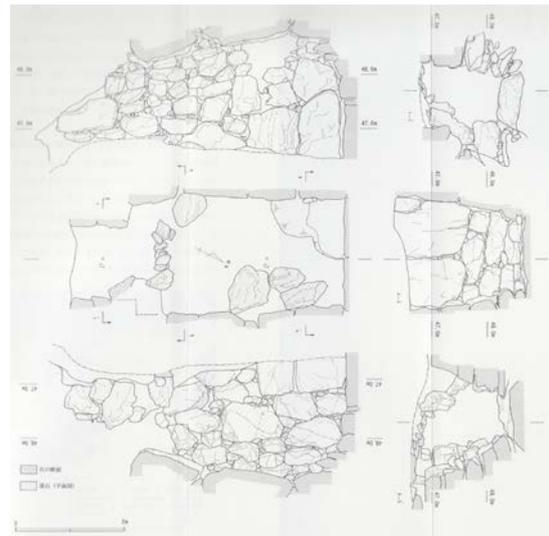


図1 南国市坂ノ松1号墳石室実測図

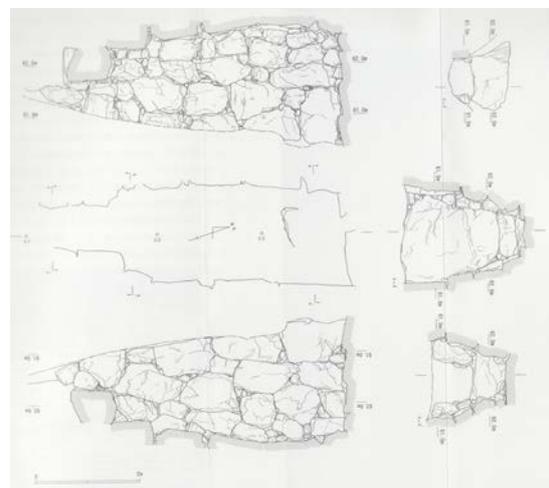


図2 香美市小倉山古墳石室実測図

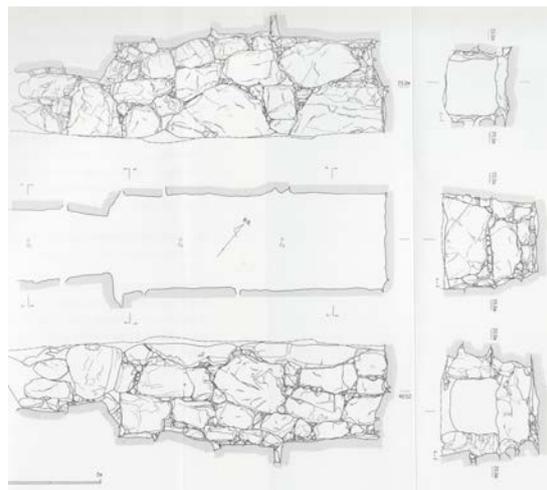


図3 南国市定林寺芝の前1号墳

階：舟岩型石室の導入（伏原大塚古墳）、第3段階：南国市域で横穴式石室が普及・風水

的選地の導入、第4段階：角塚型石室の導入という各段階である。

第1段階では、明見3号型石室が導入され、南四国に初めて横穴式石室が導入される段階である。明見3号型は、玄室の平面プランが寸詰まりの長方形をなし、左右から持ち送り強い側壁をもつ。羨道部は短く、玄室から羨道へは段差を持つ。この石室は、讃岐・阿波では見られずその円現地はまだ確定できてはいない。しかし、北山越えルートの高知側出口付近である南国市と高知市の境界に分布が集中することから、瀬戸内側から流入してきた石室である可能性が高い。TK10型式新相からTK43型式に相当しよう。

第2段階は、細長い長方形の玄室平面プランを持つ舟岩型石室が導入される。TK43型式に相当する。この時期は石室が多くはなく、土佐では突出した規模の墳丘と唯一の埴輪を持つ香美市土佐山田の伏原大塚古墳が築造される。舟岩型の淵源と伝播ルートはまだ明らかではないが、瀬戸内から導入された可能性が高いと考えている。

第3段階 舟岩型石室が普及する段階である。フィールド調査を進めていくうち、明見彦山1号墳・定林寺芝の前1号墳・坂ノ松古墳はともに風水的立地にあることが判明した。南四国への横穴式石室墳の導入過程には風水的選地が一つの鍵となることが考えられたため、横穴式石室の立地について分析を行っている。風水的選地は横穴式石室より1～2段階遅れて導入されている。土佐山田の伏原大塚古墳は風水的立地にないため、南国市に横穴式石室墳が集中して築造されるこの段階に風水が導入された可能性が考えられる。風水的立地にある古墳は讃岐にも認められるため、こうした影響は瀬戸内から伝播したものと考えられる。TK209型式期に位置づけられよう。

第4段階は角塚型石室の導入される段階である。TK217型式期には大型古墳の築造が土佐の多くの地域で停止する。唯一の大型古墳は高知市の朝倉古墳である。この古墳の石室は、角塚型石室である。これは香川県観音寺市から愛媛県四国中央市周辺に多く分布するので、ここから伝播してきた可能性が高い。朝倉古墳はこの時期の土佐の盟主墳であり、土佐の中でも新興勢力だと考えられている。こうした新興勢力が盟主権を握った背景には、瀬戸内側との連携があったことが考えられる。

このように、土佐の横穴式石室を見ると、瀬戸内側からの影響は1回だけではなく、断続的に及んでいることが明らかである。各段階の影響が、瀬戸内のいづこからきたかということに関しては不明な点もある。この点は残された課題である。

本研究の主題ではないが、フィールドワー

クの整理作業を通じて、土佐の古墳について新知見をいくつか得ることができている。詳細は、今後発行する調査報告書あるいは論考で示すが、その概要をここで示しておく。

まず1つは、明見1号墳発掘調査で出土した須恵器に関する知見である。この古墳は盗掘が激しかったものの、良好な遺存状態の須恵器が多く出土した。この須恵器を観察したところ、直径・口縁端部の作り・ヘラ記号・特徴的なヘラケズリなどから、ほぼすべてが同一工人あるいは同一工人グループによる製作であることが明らかとなっている。土佐における須恵器生産とその流通については不明なことが多いが、この分析は当時の須恵器の需給関係を考察する重要な知見となるであろう。

次に横穴式石室の実測を3基行うことにより、土佐の横穴式石室資料がかなり充実した。これまでの資料は古墳が取り違えて報告されていたり、縮尺の誤りもあったが、本研究による調査によって多くを是正することができた。

資料が充実したことにより、土佐の横穴式石室の大部分を占める舟岩型石室の細分や編年研究が可能になっている。この詳細については未発表なのでここで詳細を書くことは差し控えたい。注目されることは大型石室と標準型石室の間にはプランや石積みのあり方で類似点が認められるものがあることである。この分析を今後進めていくと、大型石室墳と標準型石室墳の有機的関係が今後明らかにされ、土佐の中における勢力関係をここから示すことができるかもしれない。

以上のように、本研究では予定以上の調査を実施し、多くの研究成果をあげることができた。さらに新たな研究視点も得ることができた。細かな点で課題は残っているとはいえ、所期の目的はおおむね達成され、予定以上の成果を得ることができたと評価できるであろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

①清家 章 2013『定林寺芝の前1号墳測量調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第12冊 査読無

②清家 章 2012「各地の古墳 南海」『古墳時代研究の現状と課題』上巻 同成社 pp. 81-97 査読無

③清家 章 2012「小蓮古墳と朝倉古墳」『考古学研究』59巻3号 pp. 104-106 査読無

④清家 章 2012「南四国における前・中期古墳の展開」『比較文化研究所年報』第28号 徳島文理大学比較文化研究所、pp: 41-47 査読無

⑤清家 章 2012「高知市朝倉古墳の立地と選

地』『古墳時代終末期の大型横穴式石室にみる瀬戸内とその周辺の政治的関係』高知大学考古学調査研究報告第10冊 高知大学人文学部考古学研究室 pp.7-20 査読無

⑥清家 章・枅家 豊・山本 亮 2012『小倉山古墳測量調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第11冊 高知大学考古学研究室査読無

⑦清家 章 2011「破碎副葬と葬送祭祀」『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学3 同成社 pp.208-215 査読無

⑧清家 章 2011「高知平野における古墳秩序の成立過程－軍事的要素を持つ秩序形成の理解のために－」『臨海地域における戦争・交流・海洋政策』リーブル出版 pp.11-33 査読無

⑨清家 章・山本 亮 2011『坂ノ松古墳測量調査報告書』高知大学考古学調査研究報告第9冊 高知大学考古学研究室 査読無

⑩清家 章 2011「首長系譜変動の諸画期と南四国の古墳」『古墳時代政権交替論の考古学的再検討』大阪大学大学院文学研究科：pp.29-42 査読無

〔学会発表〕(計3件)

①清家 章 2012「紀伊南部弥生・古墳古人骨に関する若干の考察－とくに抜歯について－」第14回高知考古学研究会(高知大学)

②清家 章 2011「南四国の様相 前期古墳非築造エリアの評価をめぐって」(徳島文理大学 古墳時代前期の四国島)

③清家 章 2011「土佐における後期・終末期古墳の立地と選地」第12回高知考古学研究会(高知県文化財団埋蔵文化財センター)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ

科学研究費「横穴式石室導入にみる南四国と瀬戸内の交流と古墳展開の研究」  
<http://souls.cc.kochi-u.ac.jp/?&rf=3980>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清家 章 (SEIKE AKIRA)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授  
研究者番号：40303995

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし